

2025 年度 亀田医療技術専門学校 学校関係者評価 報告書

令和 7 年 7 月

学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価の目的

学校法人 鉄蕉館 亀田医療技術専門学校における学校関係者評価の目的を以下のように定める。

- 1) 自己評価の評価結果について、学校外の関係者による評価を行い、自己評価結果の客観性・透明性を高めること。
- 2) 学校において卒業生・関係業界、関係団体、中学校・高等学校等、保護者・地域住民など学校関係者により構成された学校関係者評価委員会が、自己評価の結果に基づいて行う学校関係者評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、学校関係者から理解と参画を得て、地域におけるステークホルダーと専修学校との連携協力による特色ある専修学校づくりを進めること。

2. 学校関係者評価委員会名簿

属性	氏名	所属	役職
関係業界	安田 友恵	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護管理部 副部長
	泉 綾乃	社会福祉法人 太陽会 たいよう 健康管理室	室長
高校教員等	山口 健一	千葉県立長狭高等学校	校長
卒業生	佐藤 悦子	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護部主任
	福原 恵美子	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護部
在校生保護者	堀江 秀一	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護部副主任

3. 2025 年度学校関係者評価委員会の実施状況

日時：令和 7 年 5 月 26 日（月）15：00～16：25

場所：亀田医療技術専門学校 2 号館 3 階 308 教室

出席者

外部委員 5 人

- ・〔高等学校〕 山口 健一 千葉県立長狭高等学校 校長
- ・〔関係業界〕 安田 友恵 亀田総合病院看護管理部 副部長
泉 綾乃 社会福祉法人太陽会 たいよう 健康管理室 室長
- ・〔在校生保護者〕 堀江 秀一 亀田総合病院 副主任

内部委員

- ・学校長 大塚 伊佐夫
- ・副学校長 吉田 広美
- ・看護学科教育主任 関根 恵子
- ・助産学科教育主任 黒川 美和

欠席者

外部委員 〔卒業生〕佐藤 悦子 亀田総合病院 主任
〔卒業生〕福原 恵美子 亀田総合病院
内部委員 山口 文久 亀田医療技術専門学校 事務長補佐

司会：吉田

委員会次第

1. 開会、資料確認

吉田副学校長が司会を務め、資料 1～6 の有無を確認。

2. 参加者の確認 ※資料 1

外部委員については昨年度末で任期満了となったが、引き続き委員継続のお願いをし、了承を得た。ただし在校生保護者については、学生が卒業したため、今年度より新たに堀江秀一氏にお願いした。内部委員は事務長の退職により、事務長補佐の山口が就任したことを報告した。

3. 学校長挨拶

6 月末で学校長を退任し、安田委員に引き継ぐ旨を報告。引き続き忌憚のないご意見、改善に向けてのご協力をお願いした。

4. 学校関係者評価について ※資料 2

学校評価の目的、形態と定義に基づいて委員を選出し、本委員会を開催、討議内容を公開することを確認した。

5. 学校関係者評価スケジュール確認

学校評価、自己点検等のスケジュールについて確認。今年度はスケジュール通りに実施していく予定である。

6. 自己点検・自己評価の結果について ※資料 3、6

1) 「令和 6 (2024) 年度 自己点検・自己評価結果概要」評価結果と次年度目標について (資料 6)

取り組み、方法（評価項目、基準、対象者、評価時期）等を確認。

<評価結果>

Ⅰ. 教育理念・教育目的では細目 1「教育理念・教育目的は、自養成所の教育上の特徴を示している」9「看護、看護学教育、学生観は実際に教師の教育活動の指針となっている」の評価が低下している。教育の対象である学生の変化に伴い、再考する必要がある。Ⅱ. 教育目標についても同様である。

Ⅲ. 教育課程経営では、細目 38「教員が授業準備のための時間を取れる体制を整えている」が 3.4 で最も低い。ICT の活用等の業務改善が課題である。

IV. 教授・学習・評価過程では、細目 54「授業内容間の重複や整合性、発展性等が明確になっている」61「学生および教育活動を多面的に評価するために、多様な評価の方法を取り入れている」が低い評価となっている。教員全体で共有し協力を得て、教育課程編成に繋げる。また、目標にあげていた教員間の授業参観は実施できていない。実践可能な方法を検討する。

V. 経営・管理過程では、組織体制の細目の評価が低い。意思決定システムの周知が不足していたことが推測される。

VI. 入学では、入学者選抜方法の妥当性及び教育効果の視点から分析・検証することについて、教員全体の意見を反映されていないという意図が推測される。

VII. 卒業・就業・進学の評価は、卒業生の就業先での活動状況の分析が未実施であることの結果である。今年度の看護学科卒業生から実施する。助産学科は卒後 1～3 年目を対象にアンケート調査を実施し、学生支援への示唆を得た。

VIII. 地域社会/国際交流が 0.3 ポイント低下しており、介護福祉学科の廃止による影響もあるかと推測する。特に 114「看護教育活動を通して地域社会への貢献を組織的に行っている」が 3.5 と低い。講義・実習等で地域の支援は受けているが、学校として地域貢献が十分できていないという評価だと考える。

IX. 研究では、論文の執筆や発表に至っていないことから評価は横ばいではあるが、個々の学生の基礎力に応じた学習支援、国家試験対策など、実践レベルでのデータの活用は実施している。

<2024 年度目標の取り組み評価>

1) 受験者数の確保

- ・高校訪問、ガイダンスの回数、範囲を拡大した。
- ・看護学科社会人入試の回数を 1 回から 3 回に増設した。
- ・オープンキャンパスでの卒業生の登壇、大学と広報活動の協働などで亀田グループ内からの協力を得た。

→定員には達していないが、受験者は増加した。

2) 卒業生の活動状況に対する把握及び支援体制の強化

- ・卒業生の主な就業先である亀田総合病院から、就業状況や問題についての情報を得た。

→就職後の配属希望について、個々のニーズとレディネスを考慮したアドバイス及び卒後の支援体制については課題である。

3) 学生の教育効果向上

- ・看護：入学前は任意で入学前教育プログラム、入学後は全員を対象に基礎力リサーチを実施し、各教員が数名の支援対象の学生を担当して支援に当たった。

→個々の学生の状況に応じた学習支援ができた。学生の学習時間が増加した。

4) 教員の教育力向上および教職員の業務改善

- ・研修参加は平均 4.4 回、学会参加は平均 1 回であった。
- ・学生による授業評価を実施しているが、組織としての活用には至らず、教員個々での活用に留まっている。

- ・業務改善については、IT システム導入、学生委員会支援の見直し、フレックス勤務の導入について検討した。

→授業評価の活用は課題、業務改善については今年度より一部導入している。

<各学科の取り組み>

【助産学科】 ※資料 4

▶2024 年度重点目標評価

- 1) 受験者数を確保する：施設推薦の条件の再検討と広報を実施する。
 - ・施設推薦の条件である臨床経験 3 年目以上に対し要相談とし、3 施設に広報活動を行った。その結果 1 施設次年度の施設推薦に向けて、前向きな返答が得られた。他 2 施設も検討する意向であった。
- 2) 卒業生の活動状況の把握及び支援体制の強化を図る：卒後 1～3 年程度の卒業生に対し、経時的な状況把握と支援を行う。
 - ・12 月に卒後 1～3 年目の卒業生を学校へ集め、現在の職場環境や学生時代の教育についての要望などを確認する機会を作った。学生時代に分娩介助件数が少なくても、臨床で不利益なく学ぶことができていることがわかった。卒業生の活躍や悩みを知る機会となり、それを在校生へもつなげ、就職先の先輩となる学生にもコンタクトがとれた。今後も継続していきたい。
- 3) 学生の教育効果の向上を図る。
 - ・分娩件数減少に伴い、指定規則での分娩介助件数が達成できない状況が続いている。そのため、教育理念・目的にも続いた教育活動を実習での達成度の低下を捉え、実習終了後に学内演習で補うよう修正できた。しかし、その内容や時期については、実習前・実習期間中に平行して行うことで、その効果が増す可能性があった。
- 4) 教員の教育力向上及び教職員の業務改善を図る：授業評価において臨床指導者や教員の他者評価を取り入れる。
 - ・法人内の SD・FD、学会参加は主体的に取り組んでいる。しかし、教員間での授業参観や評価はできていない。

▶2025 年度の重点目標

- ①施設推薦による学生を 1 名以上確保し、総学生数を 15 名以上にする。
- ②卒後 1～3 年目の卒業生に対し、臨床での活躍・現状を知り、その支援体制の強化を図る。
- ③学生の教育効果の向上を図る。
 - ・実習前の学内演習で、実習内容を予測し臨床推論につながる演習を取り入れる。
 - ・実習期間中は、分娩介助場面を想定した演習を行い、技術とアセスメントを強化し、学生の主体性を高める教育活動を目指す。
- ④教員の教育力向上及び教職員の業務改善を図る：授業評価において臨床指導者や教員の他者評価を取り入れる。

【看護学科】 ※資料 5

▶2024 年度 重点目標評価

1) 受験生の受け入れ：学生募集活動

・進学相談会を除き、依頼のあった高等学校ガイダンス（進路説明）への参加は延べ 42 校。業務の調整を図り令和 5 年度より多く参加した（R5 年度 34 校）。

・令和 7 年度受験者数は 65 名。令和 6 年度と比べ 8 名の微増となった（R6 年度 57 名）。

・18 歳人口の減少に伴い社会人の入学を促進するため社会人入試を 1 回から 3 回へ拡充した（12 月：社会人 B 選考、2 月：社会人 C 選考）。また社会人試入の受験者を含めた高校既卒者（18 歳以上）の受験者は全日程で 19 名（入試形態：社会人 A・B・C 選考 12 名、一般 A・B・C 選考 7 名）、入学者は 13 名で全体の 26%（入学生 49 名）である。

・来校型オープンキャンパスの参加者は延べ 110 名で、参加人数は昨年度より伸びなかった（令和 5 年度 延べ 121 名）。病院内の見学は 1 グループ参加者 5 名と制限があり、5、6 月は定員 30 名としていたが、集客数を増やすため定員 30 名を解除し、7、8 月の 3 回の日程は定員の上限は設けず参加受付を試みた。しかし予想以上に当日のキャンセルが多く参加者は増えなかった。

2) 学修支援

・入学前、入学後の基礎学力支援の体制基盤（目的・選考基準・内容）を整え、学生の反応を定期的にアンケート調査し可視化して共有を図った。支援対象学生の学習の契機となったが、多重課題における持続性や個々に合った効果的な学習方法を見いだすまでには至らず課題が残った。

・入学生の基礎学力の低下がみられる。

・看護師国家試験受験において、評価領域分類Ⅱ型（解釈型）・Ⅲ型（問題解決型）の基礎学力が不足している学生が一定数いる。看護実践における現象や因果の解釈や判断に基づく知識の応用と思考過程を育む学生教育の課題が明確になった。

・看護実践力を養う臨地実習での指導過程において、時に教員の言動が学生の学ぶ意欲や行動を妨げてしまいストレスフルをもたらしてしまったこともあった。形成課題と形成評価の在り方や学びの成果を測る実習評価表の改善が浮き彫りになった。

・卒前教育の到達状況をディプロマポリシーに沿って卒業修了時にアンケート調査は行っているが、計画・実行不足により結果の分析はしていない。

・卒前教育が卒後教育に活かされている実態を把握する調査アンケートの作成が計画・実行不足により停滞し進行していない。

3) 教育力向上に向けての教育環境の整備

・教育力の維持・向上に向けて学校法人内の SD 研修や FD 研修の案内を提示し推進した。参加は任意とし、業務時間内であるため調整が必要ではあるが、テーマに応じて参加者数を見込んだが参加者は一定数にとどまった。

・研修受講後の報告・共有を図る意識は昨年度より高まり前進した。しかし、教育活動に係わる習慣的文化までには至っていない。

▶2025 年度 重点目標

1) 受験生の受け入れ：学生募集活動

- ・策定された本校のペルソナを基に目的やアプローチ・支援方法を定め共有し、学募集活動を活性化させる。
- ・学生募集検討委員会を通して、社会人や中学生向けの企画を立案し推進していく。
- ・来校型及びオンラインオープンキャンパスに繋がる ICT を駆使した情報発信（学生主体のインスタライブ等）を行う。
- ・来校型オープンキャンパスでは臨床に協力を依頼し、卒業生の登壇や将来を見据えたキャリア教育を兼ね備えたインパクトのある企画を編成し、本校の魅力を発信していく。
- ・参加受付の人数の制限は設けず対応していく。

2) 学習支援

- ・入学前、入学後基礎学力支援担当と情報を共有（基礎学力・目的・方策・支援内容・評価）し、対象学生の効果的な学習方法を見いだす契機となるよう連携しながら学生支援に努めていく。
- ・教育目標の実現や看護師国家試験に対応できる学ぶ力をつけていくことを目指して、各担当する教科科目の授業設計を見直し、思考を対話する機会を持たせ知識を基に推論や解釈、対応に繋げ創意を凝らすよう周知していき学生の反応と効果を授業評価や科目の認定試験の結果で確認していく。
- ・実習評価内容の評価の視点を提示し、学びの視点や自己評価と他者評価の相違がないように実習評価表を改善していく。
- ・臨地実習において現象や因果を看護師の視点で意味づけて解釈・判断していく思考力をつけていくため、言動を教材化し問いかけ考えさせていくよう教員間で周知し学生指導に努めていく。
- ・卒前教育の到達状況を卒業修了時のアンケートを基に評価し結果を共有していく。
- ・卒前教育が役立っているかどうかを把握していくための、卒業生に行うアンケートを作成し実施していく。

3) 教育力向上に向けての教育環境の整備

- ・学校法人内の SD 研修や FD 研修の参加を全体及び個人に推進していく。
- ・研修受講後の報告を推進し共有を図っていく。
- ・学生の学ぶ力を向上させていく学生教育について、日頃の学生対応や学習指導での悩みや不一致（言葉・思考・行動）の内容をテーマ化し教員間での対話の機会をつくり、自己の言動を顧みていく機会としていきたい。

<2025 年度の重点目標>

- 1) 入学者の確保
- 2) 基礎教育と卒後教育の連携
- 3) 教育効果の評価と向上
- 4) 教員の教育力向上

引き続き 1) 入学者確保が大きな目標となる。2)、3)、4) も改善していくことが受験者確保につ

なかるのではないかと考えるため、上記目標を達成するために取り組んでいくことを確認した。

7. 討議

討議内容は、5. 重点目標についての「ご意見、提案等」に記載する。

8. 今後の予定

・議事録・評価表を作成し、委員に送付する。意見・承認をいただいた後、学校で報告書を作成して、公開する予定。

・次回開催時期

令和8年5月25日（月）を予定。

4. 自己評価結果概要

1) 自己点検・自己評価の実施

本校では、自己点検・自己評価の取り組みとして、「看護師等養成所の教育活動等に関する自己評価指針作成検討会」報告書を基に点検・評価項目を見直し、9領域のカテゴリー及び124項目の小項目を設定した。そして、作成した評価表を基に自己点検・自己評価を実施した。

(1) 方法

作成した自己点検・自己評価表に基づき本校教員が自己評価を行う。その集計結果を踏まえ次年度の目標を導き出す。

(2) 評価項目

・9領域124項目

I. 教育理念・教育目的、 II. 教育目標、 III. 教育課程経営、 IV. 教授・学習・評価過程、 V. 経営・管理過程、 VI. 入学、 VII. 卒業・就業・進学、 VIII. 地域社会／国際交流、 IX. 研究

(3) 評価基準

・5段階評価（1：当てはまらない 2：やや当てはまらない 3：どちらとも言えない
4：やや当てはまる 5：当てはまる）

(4) 対象者

・教員15名（看護学科、助産学科）

(5) 評価時期

・令和7年2月

2) 自己点検・自己評価結果の報告

学校関係者評価委員会では、『2024年度自己点検・自己評価結果』を用いて、亀田医療技術専門学校の担当者より学校関係者評価委員に対して、各項目の自己点検実施状況及び自己評価ポイント、評価の課題、今後の改善方法等について説明をした。当日は重点目標を中心に検討をお願いした。

5. 重点目標について

1. 入学者の確保

1) 計画

① 学生募集活動を活性化させる。(看護)

- ・ 社会人や中学生に向けての企画を立案する。
- ・ ICT を活用した情報発信を行う。
- ・ 来校型オープンキャンパスでは臨床の協力を得てキャリア教育を兼ねた企画を編成し、本校の魅力を発信する。
- ・ オープンキャンパスは参加人数制限を設けずに対応する。

② 施設推薦入試による学生を1名以上確保する。(助産)

2) ご意見・提案等

- ・ 将来的に定員を見直す案もある。(内部委員)
- ・ 全国的に見ても、地方には看護学生が集まりにくい現状がある。(外部委員)
- ・ 大学も含めて地元への進学が増えたことは、学納金減額の影響はあると思う。(外部委員)
- ・ 在学生の満足度を上げることも重要と考え、昨年度末に学校生活に関するアンケートを実施し、施設・設備面での改善を進めている。(内部委員)
- ・ 施設・設備の充実は必要だが、経済面との兼ね合いが難しい。(外部委員)
- ・ 海外研修の費用の捻出が困難だったという卒業生の声を聴いた。希望制にできないか。(外部委員)
- ・ 円安のため更に海外研修に係る諸経費が高騰している。対策を講じなくてはならない時期であると認識している。(内部委員)
- ・ 大学の研修旅行は選択制になった。亀田医療大学の研修旅行は選択制になった。臨床の看護師へ参加を募り参加人数を増やすことで旅行費用を抑える取り組みを実施したが臨床からは参加希望はなかった。(外部委員)

評価結果	適切：6名(100%)	不適切：0名(0%)
〈コメント〉 ・ 学生募集については、現在取り入れた SNS での発信について効果の検証を行っていけるとよいと考える。 ・ 以前は、海外研修旅行は、亀田医療技術専門学校教育の特徴の一つでもあったが、社会情勢の変化や学生の状況で見直す時期にきているのであらうと認識した。どのような形で科目の目標達成としていくか検討が必要と考える。 ・ 社会的に見ても学生年代は減少しており、今後も集まりにくくなることは考えられる。募集人数の見直しは必要と考える。海外研修に関しても、学校側としては研修を通して学んでほしいという考えがあるだろうが、学生人数の減少、円安等からも費用の問題もあり、希望制は賛成である。 ・ 色々と御意見があったように、少子化等の現在の状況を踏まえ、定員減や必要		

経費の減額など、可能性のある方法は検討していく必要があるかもしれない。
併せて、高校の先生、保護者、そして生徒へと、それぞれに何を伝えるのかがとても大切になると思います。

- ・全体的な学生数が減少していますので、社会人や中学生まで対象を広げる取り組みは有効だと考えます。今後も積極的に実施してほしいと思います。
- ・全国的に亀田専門の認知度がどのくらいあるのか気になります。

2. 基礎教育と卒後教育の連携

1) 計画

- ① 卒業時および卒後のアンケート結果を基に評価する。(看護)
- ② 卒後1～3年目の卒業生に対し、臨床での活躍・現状を知り、その支援体制の強化を図る。(助産)

2) ご意見・提案等

- ・昨年、キャリア形成の支援として先輩看護師に触れる機会を作るご提案をいただき、今年5月に卒業生2名を招き、看護学科全学年を対象にキャリアモデルの講演会を実施した。概ね満足度が高く、他の分野の先輩の話も聞きたいという希望があった。(内部委員)
- ・今月、亀田病院の就職ガイダンスに参加した方には、各診療科の看護師の紹介冊子を渡しているのので、診療科への理解、キャリア形成に活用してほしい。(外部委員)
- ・看護教育の中に会話の技術を組み込まないといけない。対話の仕方、相手に不快感を与えないスキルを身につけさせる必要がある。(外部委員)
- ・コミュニケーション力が高いと、職場適応もスムーズになるので、学生のうちに対人能力を身につけてほしい。(外部委員)
- ・患者さまとの会話での言葉選びに(「やばい」の多用など)、会話がきちんとできているか不安を感じる時がある。(外部委員)
- ・3月に卒業した学生には、外部業者にお願いしてコミュニケーションスキルの研修を行い、ペアワークで伝える方法や傾聴などを学んだ。(内部委員)
- ・単発の実施ではなく、年に2、3回など継続的に実施する方が良い。(外部委員)

評価結果	適切：6名(100%)	不適切：0名(0%)
〈コメント〉 ・臨床と連携が取れるのは亀田医療技術専門学校の強みとなっているので継続してもらいたい。 ・専門学校に入り学ぶ学生の動機はそれぞれ違うと思いますが、今後のキャリアを考えることは大切であると思います。しかし、なかなか学生のうちから将来を見据えて学んでいる学生は少ないと思います。そのため、キャリアを考える機会を与えるためにも、また就職するにあたり今の自分が学ぶべきことなどを明確にするため卒業生やスペシャリスト(認定や特定行為研修者など)と話とする機会があってもいいかなと考えます。 ・アンケートの実施により現状や課題を把握することはとても重要だと考えます。今後		

に活かすためには、何をどのように聞くか工夫が必要だと思います。

卒業後に何が一番困っているのかなどが分かれば、指導内容にも役立てられると思います。また、卒業生の視点から母校の魅力について得られれば、生徒募集にもつながれると思います。

・ 卒後アンケートを教育に反映させる取り組みは効果的だと思います。 実践につながる教育強化に期待しています。

・ 学生のうちからコミュニケーションスキルを磨いていただき、卒後教育としても、社会人としての意識を高め成長していけるよう支援していきたい。

3. 教育効果の評価と向上

1) 計画

① 教育目標の達成および看護師国家試験に対応できる能力をつけることを目指す。(看護)

- ・ 入学前・入学後基礎学力支援担当を中心に対象学生の支援に努める。
- ・ 教科科目の授業設計を見直し、学生の授業評価や科目認定試験の結果で評価 する。

② 実習指導の充実を図る。(看護)

- ・ 看護の視点で解釈・判断する思考力をつけるため、考えさせる指導に努める。
- ・ 実習評価の視点を提示し、実習評価表を改善する。

③ 演習による技術をアセスメント力の強化を図る。(助産)

- ・ 実習前の学内演習で、実習内容を予測し臨床推論につながる演習を取り入れる。
- ・ 実習期間中は、分娩介助場面を想定した演習を行い、技術とアセスメントを強化し、学生の主体性を高める教育活動を目指す。

2) ご意見・提案等

- ・ 専門学校に入学する以前の基礎教育が必要な学生が多く、文章理解の低下がみられる。学習習慣、方法などから支援を始めている。(内部委員)
- ・ 読書離れも影響していると考えられる。高校でも朝読書の時間を設けているが、できれば幼児期～小・中学校時代からの関わりが必要なのではないか。(外部委員)
- ・ 低学力層の学生に対し学習支援を手厚く指導していると聞き、教員の負担が大きくなっていると感じる。(外部委員)
- ・ 語彙力が低く、会話をすることが苦手な学生が増えている。(内部委員)
- ・ チャット GPT を利用し文章を書く学生もおり、そのままの引用でなく参考にするなら良いが評価方法の検討が必要になっている。(内部委員)

評価結果	適切：6名（100%）	不適切：0名（0%）
〈コメント〉 ・入学生の学力低下に対応する教員の負担は大きいと感じるが、現在の支援方法で効果があるのであれば継続する必要がある。そのほかの改善策を外部から情報収集することも検討してみてもどうか。 ・社会人基礎力など就職してから不足している新人看護師は少なくありません。だからといって看護学校で不足している基礎教育を学びなおすなどは難しいと考えます。実習始まる前のコミュニケーションや接遇などの研修はあってもいいかもしれません。臨床での必要なコミュニケーションやアセスメント能力での課題を明確にするのも実習の目的の1つだと考えます。 ・人と話すこと、文章を書くこと等のコミュニケーションに必要な能力は、看護師・助産師には非常に大切な資質だと思うので、判断するための思考力や説明に必要な表現力などを高めていくための指導や評価について、先生方での共通理解がとても重要になってくると思います。 ・基礎学力支援は教員のご負担も大きいと思いますが、学生支援として大変重要なので、継続的な取り組みに期待します。 ・常に学びたいと思える環境や状況の提供も必要かと思います		

4. 教員の教育力向上

1) 計画

- ① 研修と受講後の報告を推進し共有を図る。（看護）
- ② 学生対応や学習指導に関する内容をテーマとして教員間に対話の機会を設け、自己の言動を顧みる機会とする。（看護）
- ③ 授業評価において臨床指導者や教員の他者評価を取り入れる。（助産）

2) ご意見・提案等

- ・教員の研修参加等による研鑽は必要だが、働き方との調整が必要。昨今の考え方では業務時間内で納められるようにしないといけない。（外部委員）
- ・臨床でも勤務時間内と時間外の線引きをはっきりとしたい人が多くなってきている。（外部委員）
- ・（病院が業務改善として、日勤と夜勤のユニフォームの色を変えたことに対して）ユニフォームを変えただけでは効果は表れにくく、それに伴って他の業務改善もしないといけない。（外部委員）
- ・（教育課程経営の自己評価が低下していることに対して）対象が変化していることを加味して評価結果を読み取ることも必要。働き方改革は重要だが、業務の性質上、時間内で終了できないこともあるので、業務をする際に、説明し納得した上で遂行してもらうことが必要である。（外部委員）
- ・年代が違うと認識が異なる。お互いがストレスなく働くためには双方の理解が必要となる。（外部委員）

評価結果	適切：6名（100%）	不適切：0名（0%）
〈コメント〉 ・どの分野でも働き方改革は進んでいるので、業務の見直しも含め改善に取り組んでいくことが必要と考える。 ・教員の自己研鑽も個人が必要と思えば時間を作り外部研修や学会への参加も行うと考えます。それを妨げないよう周りの業務改善や協力できる環境づくりができることを期待します。 ・多くの業務の中、研修時間を確保するのは非常に難しいことだと思いますが、資質向上を怠ることは組織の後退につながってしまうので、計画的に組み入れていくことが重要だと思います。また、これからは看護等の専門的な知識の他にも、生徒のメンタルケアなどに必要な知識を共通理解のもと身につけていくことも大切になってくると思います。 ・教員もやりがいや成長を実感できる体制づくりが、教育の質の向上にもつながると考えます。 ・教員の教育力向上にむけた取り組みに時間的制約があるのであれば、学習支援の方法の見直しや業務改善等により時間を生み出せるとよいと考えます。		